

洞の特に医学思想の研究に寄与しうるものであり、この点で、この山崎本は、きわめて資料的価値の高いものであると言えるであろう。そこで今後、更に『医事古言』をも必要に応じて参看しながら、この山崎本について一層研究してみたいと考えるものである。

(平成九年十一月例会)

土佐藩足軽・岡本兵衛の戦病死をめぐって

中西淳朗

一、戊辰戦争第二期(江戸城開城後より会津若松城開城まで)において、関東の野戦で傷つき横浜軍陣病院で死亡した土佐藩の兵士について調査したところ、四名をリストアップ出来た。その中の一人、足軽岡本兵衛の墓は、横浜市西区久保山の共葬墓地第三区にある土佐藩官修墓地には存在しない。

二、『幕末維新全殉難者名鑑・第四卷』(新人物往来社)には次の如くかかれている。

「岡本兵衛美雅、足軽、土佐郡潮江村の人。迅衝六番隊、明治元年四月二十二日下野安塚で傷、九月二十二日横浜病院で死。二十二才、横浜市西区大聖院に墓、靖国。」

また太政官日誌第十三号に記されている板垣退助の届書によれば、岡本の損傷は「重創、左耳を貫き枕骨を推く」とある。これらにより岡本の病状を大凡理解できるようになった。

三、岡本は、受傷後壬生城内の養生局(病院)に收容され、土佐藩医弘田玄又親厚らの手当てを受けた。四月二十日に江戸を出発した弘田医師らは、二十二日に壬生城に到着した。

即ち、壬生北方の安塚での銃撃戦、土佐、因州を主力とする東征軍と幕府軍伝習隊第二大隊との間で、四月二十一日夜半より翌日の明方まで戦われた。の直後に入城したわけで、忽ち超多忙となり、二日後には「看病人として此地の婦人九人を雇入れた」(弘田親厚著「会津征討日記」による)。

四、壬生城は、例幣使街道、日光街道、会津西街道が合流する今市の宿場に最も近い戦略拠点であるので、安塚の戦のあと今市方面に戦線が拡大しても城内の養生局はそのまま存在した。丹波山国農兵隊の藤野齋の『征東日誌』によれば、閏四月一日に壬生藩医・二代目斉藤玄昌(維新前に解剖・種痘の経験がある蘭方医)を召し出し、診療の加勢をさせている。また山国隊々員は閏四月二十日に安塚で負傷した隊員の見舞に壬生城に行っている。

五、前出の土佐藩医弘田玄又は嘉永年間、適塾並に大坂華岡合水堂に学んだ蘭方医であり、彼の記した「会津征討日記」を読むと、看病人の他に注目すべき記事が三つある。

①玄又は壬生城内でクロロホルムを用いて、指、肘の切断術を行った。ウイリアム・ウイリスにおくられること四ヶ月である。②壬生城内の患者総引あげが閏四月二十九日に行われ、城から駕籠と河船で江戸まで帰って来た。古河歴史博物館の元館長石川治氏のご教示によれば、城西方を流れる思川を都

賀船(高瀬船)で下れるそうで、弘田の日記によれば、渡良瀬川の合流点をへて利根川へ出、翌日関宿に至り、夜船に乗りかえて江戸川を下り、五月二日朝、江戸湾から隅田川をへて鍛冶橋のほとりに着岸し土佐藩上屋敷に到着したという。この河船による患者輸送については今まで報告はなく、新発掘である。③五月八日、弘田玄又は岡本兵衛ら七名の傷病兵をつれて横浜病院に入った。

六、横浜軍陣病院に入院した岡本兵衛は、老女「はま」の介抱を四ヶ月半うけた。彼女の介抱は、心得方宜しく能く仕え候」ということで、岡本死後五日に褒美として金百疋を軍からいただいた。「はま」と岡本は親子の如き年齢差があり、演者の想像では「はま」が明治七年に岡本の遺骨をひきとり、どこかに彼の墓をたてたと思いたい。大聖院の現任職の話では、岡本兵衛、「はま」という方々の話は知らないということであった。

(平成九年十一月例会)

ビタミンの発見に対する漢方医学の貢献

山下政三

ビタミンの発見にたどりつく医学の流れには二つがある。本流は東洋の脚気の研究から進む流れで、支流はヨーロッパの実験栄養学から進む流れである。やがてこの二つが合流す

るのである。

脚気は中国の晋の時代、三世紀、に始まり、次第に全東洋さらには西洋にも広がるが、それに並行して脚気の研究も広く行われるようになる。

日本には、平安時代に隋・唐の脚気医学が導入され、以後いろいろと研究される。

江戸末期から明治初期にかけて、漢方脚気専門医として名高かった遠田澄庵は、脚気について大変な実力をもっていたが、脚気の原因は米食にある、というまったく独創の「脚気米因説」を唱えた。日常の食餌の「米」に着目した、画期的かつ卓越した脚気原因説であった。

京都療病院の教師シヨイベは、来日以来脚気の研究にはげみ、脚気伝染病説を唱えていたが、遠田澄庵の実力を知り高く評価していた。そして遠田澄庵の「脚気米因説」を、自分の伝染病説とはちがうが独自の原因説であると認め、「日本の脚気」というドイツ語の原著論文の中で、それを世界に紹介した。

パタピアの研究所で脚気の原因研究にはげんでいたオランダ医エイクマンは、偶然のことから「ニフトリの脚気」を発見し、原因の究明に努力を傾けた。しかしエイクマンは、シヨイベの脚気論文を研究の手本にしていたため、「脚気の原因は細菌である」という伝染病説にとらわれ、ひたすら細菌さがしに全力をあげた。だが、いかに努力しても脚気の原因菌は見つからず、伝染病説に行きづまった。